

MIKAMARO . NATSUME

新湖西市誕生記念

新居関所史料館企画展

郷土の国学者

夏目甕磨展

2010年7月28日●—9月5日●



東海道五拾三次之内
白須賀(部分)

新居関所史料館

夏目甕磨像(部分)個人蔵

はじめに

江戸時代後期の国学者、そして歌人である夏目甕磨は、安永2年（1773）5月5日、遠江国浜名郡白須賀宿（湖西市白須賀）に生まれました。20歳で家業の造り酒屋を継ぎ、名主役を務めながら縣居学派の内山真龍、本居宣長について国学を修め、国書出版の傍ら多くの著書や和歌を遺しました。

平成22年3月の湖西市・新居町合併による新湖西市誕生を記念し、新居宿とも縁のある国学者夏目甕磨に焦点を絞り、家業を傾けながらも国学の研究に邁進し、遠江国学を大成させた偉業を紹介します。

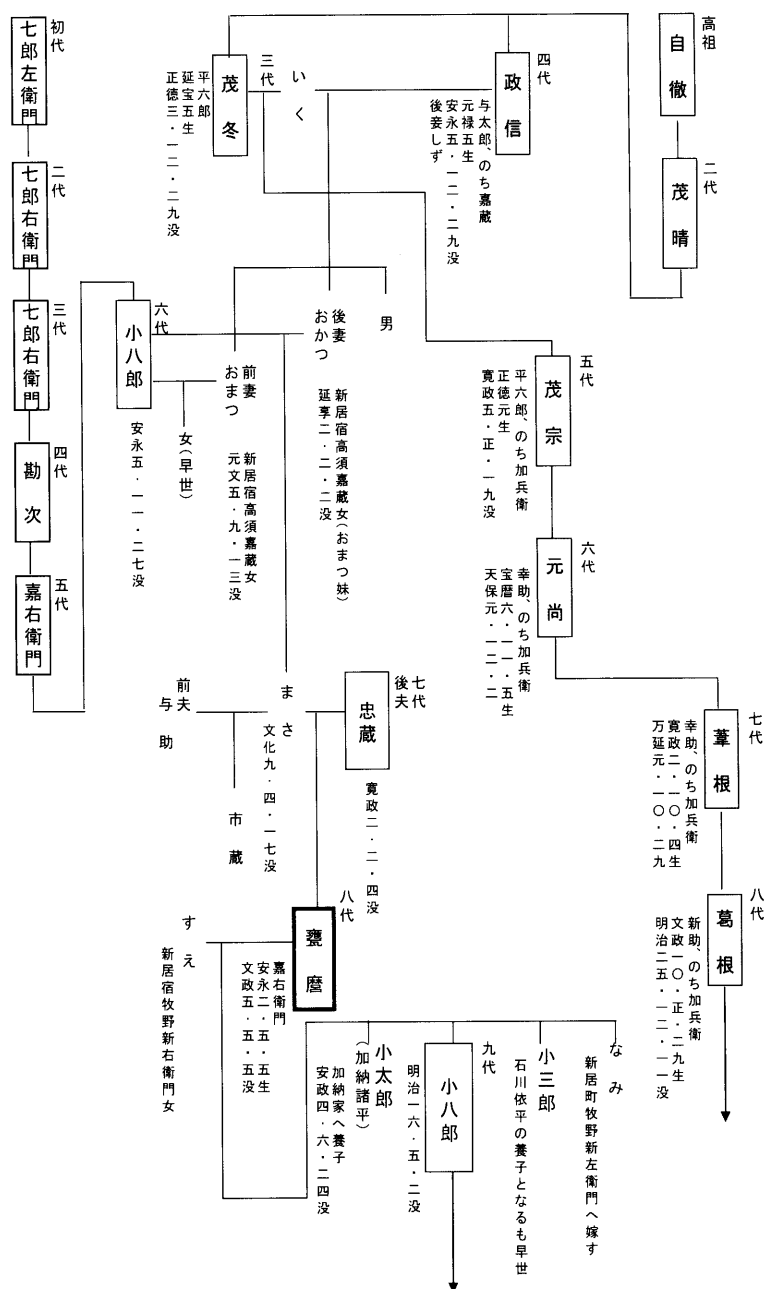
甕磨の生い立ち

夏目甕磨は、安永2年（1773）5月5日、白須賀宿で酒造業を営む忠蔵とまさの長男として生まれました。幼名を臼太、通称嘉右衛門うすたとって、夏目家8代目にあたります。

夏目家は、もとは三河国雲谷村（豊橋市）の出身で、5代目嘉右衛門の代に白須賀に移住してきました。6代目小八郎は享保年間に酒造業を始め、次第に家業も栄え、宝暦年間には白須賀宿の名主を務めるほどになり、甕磨自身も20歳のころに名主職を継いでいます。

ところで甕磨の祖母、すなわち6代目小八郎の妻まつは、新居宿屈指の豪商であった高須家4代目政信の長女でした。しかしそのまつが早死したため、妹のかつが後妻に入りました。また、甕磨自身も新居宿の牧野家から妻のすえめとを娶っています。牧野家は新居宿の中町、高須家の向かいにあり、享和年間には問屋役、その後庄屋役を務めた家柄でした。

夏目家・高須家系図



内田旭「みかまろの話」（『湖西の文化』第4号）、
「本家系図」（高須家文書）をもとに作成。

このように夏目家にとって新居は縁が深い土地柄であったほか、甕磨自身も、新居の国学者たちと交流があり、後の人生に大きな影響を与えることになるのです。

遠州国学と甕磨

遠州地方の国学者といえは賀茂真淵がいます。真淵は元禄10年(1697)3月、伊場村(浜松市)の神官岡部政信の三男として生まれました。通称庄助、三四、淵満ともいいました。

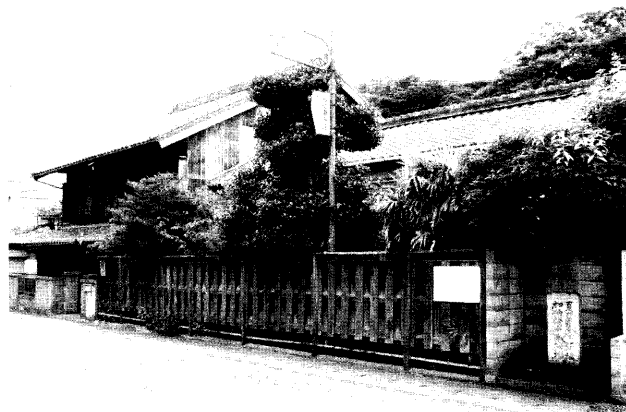
享保18年(1733)に上京し、荷田春満に師事。春満は「万葉集」・「古事記」・「日本書紀」などの古典や国史研究の基礎を築き、復古神道を提唱しました。春満の死後、真淵は元文元年(1736)江戸に出て、八代将軍徳川吉宗の次男、田安宗武に仕えました。真淵は、「万葉集」などの古典研究を通して万葉風の和歌を復興し、古代日本人の精神を研究しました。真淵は、春満の思想を受け継いで国学を樹立、荷田春満・本居宣長・平田篤胤とともに「国学の四大人」と言われました。

江戸における真淵の活躍に引きかえ、遠州地方では大谷村(浜松市天竜区)の庄屋内山真龍が宝暦10年(1760)、浜松を訪れた真淵に出会い、同12年に入門しました。これによって、国学が農村部へ広がる要因となり、遠州国学の発展を促すことになったのです。

真龍は、真淵の没後、宣長と連絡を取り合いながら「風土記」研究を熱心に行い、諸国を実地踏査して「出雲風土記解」、「遠江国風土記伝」を相次いで完成させました。

明和6年(1769)10月、真淵は73歳でこの世を去りますが、真淵の国学は伊勢松坂の本居宣長に受け継がれ、遠州の国学者たちも宣長の薫陶を受ける門人が多く出ました。

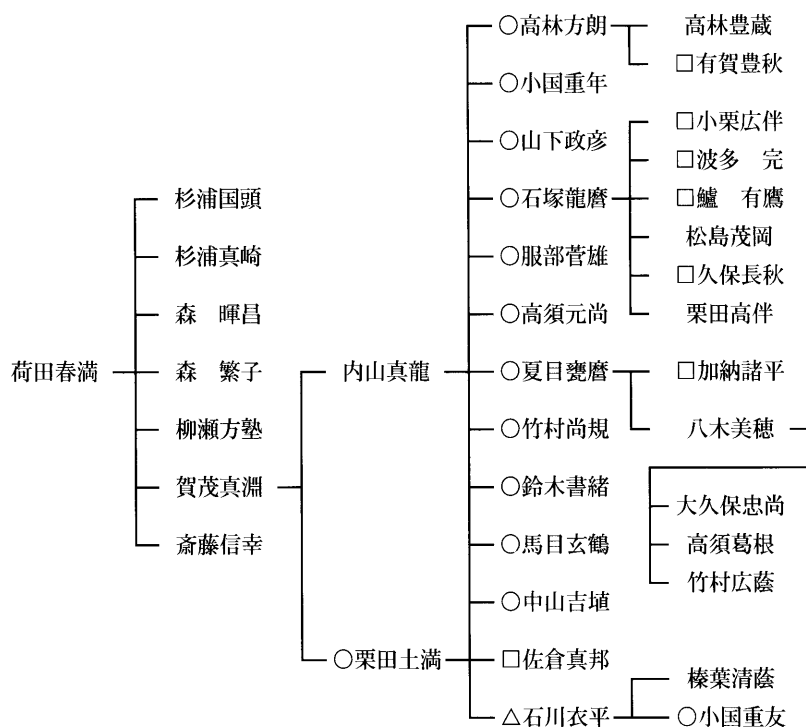
享和元年(1801)2月、甕磨は石塚龍磨、高林方朗・竹村尚規・高須元尚らとともに近畿への旅に出かけ、その途中に伊勢松坂の本居宣長を訪問しました。竹村尚規はこのときの旅を「さかりの花の日記」に記しました。



夏目甕磨邸宅跡(湖西市白須賀)

遠州国学者の系統図

○：宣長門人 □：大平門人 △：春庭門人



『浜松市史』2 517 ページの図をもとに作成。

宣長は、彼らの訪問から7カ月後の9月に死去しました。宣長には実子の春庭^{はるにわ}と、養子の大平^{おおひら}がおり、ともに宣長の学問を継承していました。春庭には甕麿^{よりむら}、石塚龍麿、石川依平らが、大平には小栗広伴^{ひろとも}、竹村尚規^{すずきありたか}、そして新居宿の鱸有鷹らの国学者たちが入門しました。

真淵、宣長の死後、遠州の国学者たちは各地で霊祭や歌会を開催し、真淵や宣長の国学思想を広めていったのでした。

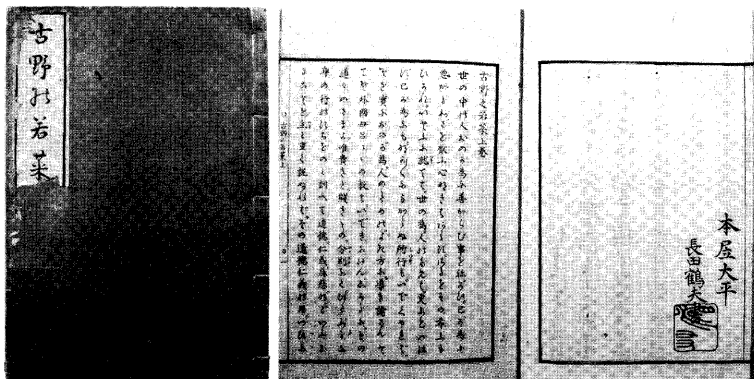
甕麿の国学思想

幼少期の甕麿がどのようにして国学・歌道を学んだのかよく分かっていません。

寛政9年(1797)8月、甕麿は25歳のとき内山真龍に入門、翌年、真龍のすすめで本居宣長の門人となりました。享和元年(1801)、宣長の没後は本居春庭に入門、本居大平を師と仰ぎ、国学・歌道の研究に励みました。そして文化11年(1814)4月、42歳になった甕麿は名主役を退き、家業の酒造業を他人に任せ、自らは国学と歌道の研究に没頭するようになりました。

真淵や宣長の死後、学問の方法や国学思想は新しい流れへと変わりつつありました。中でも「国学の四大人」の一人、平田篤胤は、宣長の古道を明らかにするという文献主義的方法は継承せず、仏教や儒教・道教・蘭学・キリスト教など、さまざまな宗教を研究するなかで独自の神学を打ち立て、国学に新たな影響をもたらしたのです。

篤胤は文化10年、^{たまのみはしら}「霊能真柱」を刊行します。これは、人間の死後について論じたもので、宣



夏目甕麿「吉野の若菜」

文化6年(1809)著、文政13年(1830)甕麿の長男加納諸平によって刊行されました。このほか甕麿の著作として「万葉摘草」「国県神考」「駿河国号考」などがあります。

甕麿の出版事業

甕麿は、国学の興隆を念願し、国学書の出版活動に着手しました。文政2年(1819)、先ず手始めに^{すすのやう しみやにつき}「鈴屋大人都日記」を発刊しました。この日記は、享和元年(1801)4月、宣長72歳のときに公卿に対し講義をするために京都へ旅行したときのものです、宣長に同行した石塚龍麿によって記述された日記でした。

その中で、甕麿自ら「都日記を彫れる所由」として、国学発祥の地である遠江から国史官牒のみならず歌物語などの書物を編さんし広めることが、遠江の国学者の一人として自らの使命であると、国書出版の理由を述べています。

長の学説を否定し、儒教・道教などの宗教観を取り入れ、神道の宗教観を打ち立てたものでした。

これに対し甕麿は文化14年、「^{よみもんどう}黄泉問答」を著し、篤胤の学説に反論し宣長の学説の正当性を主張しました。

こうした背景から、遠江国学の発祥の地であり、また真淵や宣長の教えこそが国学思想の本意であると考えた甕麿は、国学の復興を目指したものと思われます。

これを契機に甕磨は翌年に賀茂真淵の「万葉集遠江歌考」を刊行しました。これは、文政元年(1818)9月、浜松で賀茂真淵 50 年祭を開いたときに渡辺直之より示され、甕磨が初めてその存在を知ったものだといえます。その後も栗田高伴の「万葉一句類語抄」、服部菅雄の「篠家文集」など、相次いで刊行しました。

ところで、甕磨の出版事業は、順調に進んだわけではありませんでした。当時の印刷は今と違って版木を彫り、さらに一枚一枚摺り上げ、製本するという非常に面倒な作業で、多額の費用を必要としました。前述の出版物のほかに甕

磨は、遠江の国学者たちの研究書や歌集などの出版を計画していましたが、家業の方も決して順調ではなかったようで、とかく出版費用を捻出するのに苦労しました。

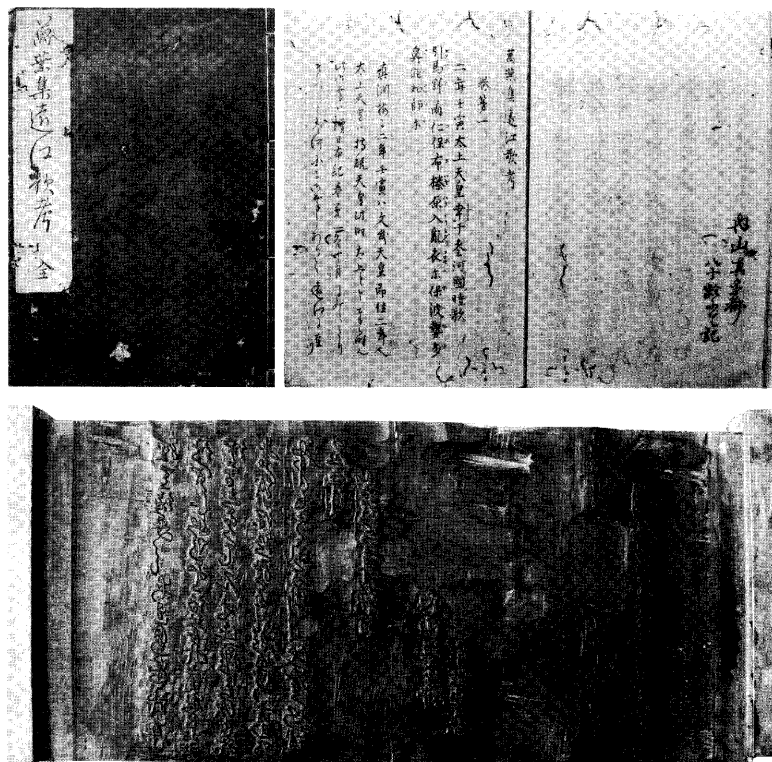
最初に出版した「鈴屋大人都日記」は上下2冊で、上巻は名古屋で刊行しましたが、下巻は彫り工を白須賀の自宅に呼んで彫らせ刊行したことから、出版費用がかさんだといえます。しかもさまざまな人に配本したものの、代金の回収が滞り、既に着手していた別の出版物の資金の捻出に迫られる状況でした。

そこで甕磨は、国書出版に伴う費用を捻出するために青梅の販売を行いました。甕磨は家業を退いた後、庵を結び「萩園」と名づけました。この庵の庭に梅の木を植え、梅の実を販売して出版費用に充てようと計画していたのでした。中でも甕磨にとって縁の深い新居宿の飯田昌秀、鱸有鷹、疋田東艸らに書簡を送り青梅販売の斡旋を呼びかけたのでした。

飯田昌秀は新居宿の本陣当主、鱸有鷹は本居大平の門人で、父の有飛は国学、国語学者で賀茂真淵や本居宣長の学問を批判した人物です。疋田東艸は、新居宿の旅籠紀伊屋の当主疋田弥左衛門で、いずれも甕磨と親交がありました。

甕磨は、青梅販売以外にも出版資金獲得のため、さまざまな方法を考えていたといえます。例えば蔵書販売、文政の初めに発見された浜名橋の橋板・橋杭を使った文台の販売、不用になった書画類を寄贈してもらい屏風に仕立て販売、さらには親交のあった新居宿の鱸有鷹に浜名橋、高師山の絵を描いてもらい、古歌をあしらったものを木版刷りにして販売するというものでした。

いずれにしても、甕磨が企画した国書の出版事業は資金難に加え、自らの体調の悪化により頓挫することになるのです。



賀茂真淵「万葉集遠江歌考」と版木

甕磨の晩年と夏目家

文政4年（1821）2月、甕磨は次男諸根^{もろね}を連れて急遽上方へ向け旅立ちました。出立に先立ち新居の高須嘉兵衛に宛てた書状によると、金毘羅参りを口実に、出版に向けての交渉と持病のうつ病の治療が目的だったようです。

上方に滞在中、甕磨は「みなづきの記、ふみづきの記」を著しています。その後岸和田に移った甕磨は9月、本居大平の再三の招きで和歌山を訪れました。大平は9月初めに次男の清島^{きよしま}を亡くしたばかりで、また自らも老病で甕磨に代講を依頼したのでした。和歌山に滞在中の甕磨の体調も悪かったようで、11月には長男諸平が和歌山の甕磨を訪ね、翌年3月まで滞在しました。そして、11月24日に白須賀の自宅（萩園）が火災で焼失したことを知った甕磨は非常に落胆したといいます。文政5年（1822）3月、遠江国佐野郡伊達方村（掛川市）の石川依平に宛てた書

状から、白須賀をなかば夜逃げ同然で出てきた甕磨は、故郷に残してきた子どもたちの行く末を案じていたことがわかります。

長男諸平^{もろひら}と次男諸根^{もろね}についてはひとまず安心していましたが、三男釜三^{かまぞう}の行く末を案じ、出来れば依平に引き取ってもらいたいと切望しています。夏目家は次男の諸根が跡を継ぎ、長男諸平は文政6年、紀州和歌山藩^{かのういちく}の藩医加納伊竹家へ養子となり、歌人、国学者として活躍する一方、紀州徳川家に仕えていた大平の推挙により紀州藩に出仕し、天保2年（1831）に「紀伊国統風土記」、同6年には「紀伊国名所図会^{ずえ}」の編さん

に携わりました。安政3年（1856）、紀州藩に開設された国学所の総裁となりましたが、翌年6月、52歳でこの世を去りました。

また、甕磨が気がかりだった三男釜三も文政6年、甕磨の願いどおり石川依平の養子となりましたが、早世しました。

こうして、子どもたちの行く末^{こゝろ}を案じていた甕磨でしたが、文政5年5月5日、摂津国昆陽^{こや}（兵庫県伊丹市）で不慮の死をとげ、50歳の生涯を閉じました。



夏目甕磨顕彰碑（潮見坂上）

大正13年、潮見坂上に建立されました。

右隣の石碑は長男加納諸平の碑。



夏目甕磨と妻すえの墓

（豊橋市普門寺）

甕麿と親交のあった人たち

たか す もとなお

高須元尚 1756 – 1830

あし ね

葦根 1790 – 1860

高須家は新居宿で油問屋を営んだ豪商で「若林屋」といいました。初代の自徹は若林村（浜松市）の生まれで、後に新居宿に居住しました。高須家は夏目家とも縁が深く、甕麿の祖母の実家でもあり、長男諸平も幼少のころ高須家に預けられていました。

元尚は高須家6代目で、はじめ幸助、のちに加兵衛（嘉兵衛とも）と改めました。若くから和歌を詠み、遠州の国学者たちとも交流があり、享和元年（1801）、高林方朗、石塚龍麿、夏目甕麿、竹村尚規とともに近畿への旅の途中、松坂の本居宣長を訪ね入門しています。

葦根は元尚の子ではじめ幸助、のちに加兵衛と改めました。甕麿に和歌を学ぶとともに本居大平に入門しました。甕麿の長男諸平が幼少のころ高須家に預けられていたとき、諸平に算術を教えたといわれています。

いしづか たつ まろ

石塚龍麿 1764 – 1823

ふ ち

遠江国敷智郡細田村（浜松市）の庄屋石塚司馬右衛門の次男で、通称八十右衛門、名は矩慶、後に龍麿といいました。天明6年（1786）内山真龍に入門後、寛政元年（1789）8月、宣長を訪ね入門。享和元年（1801）、宣長最後の上京に随行し「鈴屋大人都日記」を執筆、文政2年（1819）に甕麿によって刊行されました。著書に「古言清濁考」、「仮名遣奥山路」などがあります。

たかばやし みちあきら

高林方朗 1769 – 1847

遠江国敷知郡有玉下村（浜松市）の庄屋で、通称勝三郎、伊兵衛、号は臣下庵といいました。内山真龍、本居宣長に師事し、吉田神道も学びました。東海地方の国学の普及に努め、著作に「二条日記」などがあります。

はつとり すが お

服部菅雄 1775 – 1837

いな さ

遠江国引佐郡都田村（浜松市）の富田与右衛門の次男に生まれ、駿河国志太郡島田宿の服部家の養子となりました。内山真龍、本居宣長に国学を学び、全国を放浪しました。「篠家文集」は甕麿によって刊行されました。

たけむら なおのり

竹村尚規 1781 – 1811

遠江国敷知郡入野村（浜松市）の生まれで、通称又右衛門といいました。代々酒造業を営んでおり、父は竹村方壺。石塚龍麿に歌道の教えを受け、和歌をよくしました。享和元年（1801）3月、本居宣長に入門、のち本居大平の信望を得、文化2年（1805）9月には大平が尚規宅に数日間滞在しました。著書に「竹の五百枝」「いくみ竹」があり、旅日記「さかりの花の日記」があります。

いしかわ よりひら

石川依平 1791 – 1859

遠江国佐野郡伊達方村（掛川市）の大庄屋の家に生まれ、通称為蔵といいました。幼くして和歌に長じ、6歳の時、評判を聞いた掛川藩主太田資順に召され歌を詠じたといわれています。間もなく冷泉為章に入門し本格的に歌道を学びました。その後、同郷の栗田土満に入門し、国学にも精進しました。家集に「柳園詠草」がある他、著書に「万葉集三山歌考」などがあります。

いいだ まさひで

飯田昌秀 1793 – 1832

三河国西方村（愛知県蒲郡市）の山本茂義の次男で、文化4年（1807）、新居宿本陣飯田家の養子となり、文政2年（1819）、娘のれつと結婚。文化4年に吉田藩士の中山美石に入門、同10年、夏目甕麿の推薦で本居大平に入門しました。また同年、中山美石が新居関所の下改役として赴任すると、同14年、自宅に新居宿内外の子弟を集めて本陣塾を開きました。なお、吉田羽田八幡宮（愛知県豊橋市）の神主羽田野家の養子となった羽田野敬雄は実弟にあたります。

すずき ありたか

鱈 有鷹 ? – 1840

新居宿で旅籠尾張屋を営む有飛の次男に生まれ、幼名を章作（正作とも）、多之丞、丹六またを多三次といいました。内山真龍、本居大平の門人で、画名を「蘆村」といって画人としても有名。父有飛は、国語・古典研究、俳諧、狂歌を極め、賀茂真淵や本居宣長の学説を批判しました。

展示資料目録

資料名	年号	頁数	作者等	所蔵者等
養摩歌碑拓本（蔵法寺）		1 枚		
古事記上（写本）	文政 9 年写	1 冊		高須家文書（当館）
古事記上巻下（写本）	文政 9 年写	1 冊		高須家文書（当館）
日本書紀神日本磐余彦天皇（写本）		1 冊		高須家文書（当館）
日本書紀神代上之四（写本）		1 冊		高須家文書（当館）
日本書紀神代下之一（写本）		1 冊		高須家文書（当館）
釈日本記一～十		5 冊		高須家文書（当館）
古今和歌集巻一			高須葛根	高須家文書（当館）
古野之若菜		2 冊	夏目養摩	当館
書簡				夏目養摩顕彰会
書簡				夏目養摩顕彰会
遠江風土記（葛根写）	弘化 3 年	1 冊	日本総国風土記第四十二	高須家文書（当館）
万葉略解補闕一ノ巻（高須葛根写）	弘化 3 年	1 冊	八木美穂	高須家文書（当館）
問答集綴 問答の詞		1 冊	栗田土麻呂	高須家文書（当館）
萬葉集遠江歌考 全	文政 3 年	1 冊	夏目養摩校	当館
万葉集遠江歌考版本				夏目養摩顕彰会
鈴屋大人都日記上	文政 2 年	1 冊	石塚龍磨	高須家文書（当館）
鈴屋大人都日記下	文政 2 年	1 冊	石塚龍磨	高須家文書（当館）
鈴屋大人都日記版本				夏目養摩顕彰会
篠家文集版本				夏目養摩顕彰会
浜名橋図		1 面	鱸有鷹	当館
萩園家集		1 冊	夏目養摩	高須家文書（当館）
短冊		1 枚	萩園蔵	高須家文書（当館）
短冊		1 枚	有飛	高須家文書（当館）
短冊		1 枚	元尚	高須家文書（当館）
三拾番歌合	享和 2 年	1 冊	高須元尚	高須家文書（当館）
判着大平大人 六十二番歌合	文化 3 年	1 冊	催主延庸（三河亀山士井本彦馬）	高須家文書（当館）
歌合三拾貳番			催主広当（三州前芝加藤六蔵）	高須家文書（当館）
歌		1 冊		高須家文書（当館）
秋津彦美豆桜根大人		1 冊		高須家文書（当館）
養摩書簡		1 巻		井上正弘氏（蔵法寺）
養摩和歌		1 幅		井上正弘氏（蔵法寺）
萩（芽子）園翁柳園翁霊祭祀詞并歌	明治24年	1 冊	葛根	高須家文書（当館）
中林詠冲			遺柳園会	高須家文書（当館）
八木美穂短歌一首	5 月 5 日作	1 枚	八木美穂	高須家文書（当館）
萬葉新採百首 賀茂大人抄 続新採百首 石川大人抄	明治22年	1 冊	萬葉新百首 賀茂真淵 抄	高須家文書（当館）
松能婦留枝	文政 8 年	1 冊	御野屋の主	高須家文書（当館）
加納兄瓶和歌	嘉永 6 年	1 枚	兄瓶	高須家文書（当館）
歌		1 面	加納諸平	当館
山陵図		1 枚		当館
山陵図		1 枚		当館
御陵修復願（道しるべ付案内）	安政 3 年	1 通	安田三太夫	高須家文書（当館）
乍恐以書付奉願上候覚 （慶典再興のため御陵修補に付献金願書）	11 日	2 葉	新町 伊賀屋源助	高須家文書（当館）
皇陵図		1 巻		夏目養摩顕彰会
柿園詠草一	嘉永 6 年	1 冊	加納兄瓶	柴田家文書（当館）
柿園詠草二	嘉永 6 年	1 冊	加納兄瓶	柴田家文書（当館）
加納諸平書簡			加納諸平	高須家文書（当館）
類題鯉玉集二編下巻	文政11年	1 冊	加納諸平	高須家文書（当館）
類題鯉玉集三編上巻	天保 7 年	1 冊	加納諸平	高須家文書（当館）
類題鯉玉集三編下巻	天保 7 年	1 冊	加納諸平	高須家文書（当館）
類題鯉玉集	天保12年	1 冊	加納諸平	高須家文書（当館）
類題鯉玉集六編下巻	嘉永 4 年	1 冊	加納諸平	高須家文書（当館）
類題鯉玉集七編上巻	嘉永 7 年	1 冊	加納諸平	高須家文書（当館）
類題鯉玉集七編下巻	嘉永 7 年	1 冊	加納諸平	高須家文書（当館）
写真		6 点		
（夏目養摩邸跡・夏目養摩邸跡全景・養摩記念碑・諸平記念碑・汐見坂公園の全景・養摩歌碑（蔵法寺））				

本書は、平成 22 年 7 月 28 日（水）から 9 月 5 日（日）まで開催の企画展「郷土の国学者 夏目養摩展」の解説書です。

【主な参考文献】

夏目隆文『橘逸勢と夏目養摩の研究』・内田旭『養摩書簡集抄』（静岡県郷土研究）第 19 輯・岩崎鐵志『『東海道人物志』による宿場文化論考』（『東海道交通史の研究』）・『浜松市史』2

新湖西市誕生記念 新居関所史料館企画展
郷土の国学者 夏目養摩展
発行／新居関所史料館